

---

# 空の心に

桜井 秦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空の心に

### 【Nコード】

N4580B

### 【作者名】

桜井秦

### 【あらすじ】

東京の私立高校に通う主人公遠藤圭佑は少々変わり者だが、平凡な日々をすごしていた。だが圭佑には人には言えないあるものを心に宿していた。そんな彼の日常が崩れたとき、彼は人としての何かを試されるのであった。

## 始まりの出会い その1

すべてが終わったんだな、と僕は思った。

今まで積み重ねてきた日々も、友情も、愛も、何もかも終わったんだと。

今の俺には何も、何も残ってはいなかったんだ。

僕がもう少し強ければ、こんなことにはならなかったんだろうか。

「……………あれ？」

それは、無慈悲な現実だった。

この5ヶ月間すごしてきた日々を にしてしまう。

そんな現実だった。

人を恐れ始めたあのときよりももっと、深い闇に私は落ちてしまった。

「お前ってさ、果てしなく子供か、もしくは、果てしなく年寄りだよなー」

そんなことを僕の友人、川口浩人が口にした。

「どういう意味だよ？」

僕は言われている意味がわからず、率直に聞いてみた。

「いやだってさ、お前って行動とかがすつつつつごく子供っぽいぐせに、考えてることとかありえねえっつーか、なんっつーか……」  
そういつて少し唸った。

しかし、どうやら本人もよくわかってないみたいで、

「悪い、言葉がうまくまとまんねーや」

あっさりと考えることをやめてしまった。

「はあ、今度からちゃんと言葉がまとまってからしゃべれ」

少し浩人が何を言いたかったのか気になったが、言及しないことにした。

「そんなことしてたら一言言うのに時間経ちすぎるっつーの  
やれやれ、といった感じで手をひらひらと振った。

「って、そんなことよりコトコって娘を早く紹介しろよー」  
なにやら興味津々というか、下心が見え見えな目をしてそんなこと  
を訴えてきた。

「うるさい、誰が琴子をお前なんかを紹介するか」

僕はそんな危険な浩人を一蹴した。

琴子というのは僕の幼馴染で今はドイツにいる。

昔僕は愛知県にある一宮市という所に住んでいてそこで僕と琴子は  
知り合った。

小学生のときだ。

琴子はいじめられていて、たまたま通りかかった僕が助けてあげた  
ら、もれなくついてきた。

琴子は気が小さく、おつちよきおちよいで、そして…その、可愛か  
った。

今では最後の部分以外見る影もない。

僕らの目の前では。

「なあ、紹介してくれよー」

まだ浩人は諦めきれないのか、僕の肩をゆさゆさと揺さぶってきた。

「は、離せ。鬱陶しい」

いくら手を払っても、まるでどこぞのホラー映画のゾンビのように  
しがみついてくる。

「お前は恵まれてるんだから、3人ぐらいいいじゃねえかよー」  
まだしがみついてくる。

恵まれてるというのは僕が一宮で出会った女の子が普通の人よりい  
っぱいいいるという意味で、何も僕が誰かと付き合っていたりするわけ  
ではない。

しかし、浩人から見れば、

「お前みたいなどこかのゲームの主人公みたいなやつなんて俺らみ  
たいな一般人から見れば羨ましくてしょうがねえんだよ」

というこらしい。

「お前、これで三人目だぞ？断る」

紹介するのがめんどくさいから

「ちっ、こうなったら桐ちゃんあたりにも紹介してもらおうか。われらが琴子ちゃんを」

……………はい？

「そうなたら今日の夜交渉だな、うん」  
何かひとりであなづいてるね、うん。

「いやー、教室に戻るうではないか」

あー、マジでこの人、ヤツチマオウカ

「どうしたよ圭佑？」

満面の笑みで浩人は僕の名前を呼んだ。

僕も満面の笑顔で答えることにした。

「桐に頼んだら容赦なく殺してあげるから」

僕たちはともに笑みを崩さずに教室に戻った。

## 始まりの出会い その2

授業も終わり、僕が帰り支度をしていると

「なあ、圭佑。ゲーセン行こうぜ」

……僕今月お金少ないのに

1プレイ100円、僕はけっこう熱くなるタイプだから10回はやるんだろうなあ

そして所持金5000円

「まあ、いいけど」

ちよつと遊びたい気分だったし

「で、例のごとく……」

「ガ ダム」

一応著作権関連のあれがあるので名前は伏せておこう

「じゃレッツゴー」

「はいはい」

その後

……お金1500円もつかっちゃった  
ぐすん

「熱くなりすぎだなあ、僕」

今月は質素に生きよう

「で、だめか？」

「何が？」

まったく聞いてなかった。

「だから、琴子ちゃんを紹介しろって話」

………またか

「いや、だめだって」

「いいじゃねえか、ネット上なんだし」  
ネット上

そう、僕がこいつに女の子を直接紹介することは距離的に無理なので、

ネットを利用している。

……世の中便利になっただなあ

メッセンジャーとか、ウェブカメラとか

「お願いだよ圭佑」

「ええい、引っ付くな」

あまりにもしつこい奴の手をむりやり引き剥がした

「じゃあ本人に了承得たら紹介してくれるか？」

……まあ、それぐらいいいか

どうせ、本人拒否するだろうし

「わかった。それぐらいはするよ」

「やった。これで俺にも薔薇色の人生が……」

「こない」

それはないと思う

あいつが、琴子があの状態のままだと

「琴子、か」

元気でやってるのかな

僕はネオンで輝いている街の上にある漆黒の空を見上げた。

## 始まりの出会い その3

夢から目が覚めた

うーん、眠い

で、でも二度寝したら〜、ZZZ

……。

「……………あれ？」

え、えつと今……………

「し、七時四十分!？」

あうう、い、いそがなくちゃ

えつと髪梳かして、歯磨いて、顔洗って、ご飯……………

「あ、あれ？」

本日二度目の驚き

「えつと、六時五十分？」

…

「うう〜時間読み間違えた〜」

ぐすん、もつと寝れたのに〜

「…ちよつと早いけど学校行こう」

そう決めた私はご飯をちゃんと食べて学校に向かった。

……

外に出ると足ががくがくしてくる

吐き気がする

立っでいられなくなったりもする

でも、我慢

「ひ、一人でがんばるって決めたんだから」

うう、ふらふらする

そうやってふらふら歩いてたら

「おっはよう〜!!」

なんかやたらにハイテンションな人がやってきた

「うう、おはようローラ」

この子はローラ

苗字はなんでか教えてくれない

いつも元気な女の子

「大丈夫なの？琴子」

あ、ちよつと心配性

「う、うん、大丈夫。学校に着きさえすれば直るから」

これは本当。

知らない人がいない場所にさえ着けば、

知らない人がいなければ、

私は大丈夫なんだから。

「そつ、じゃ急いでいきましようか」

そういつて私の手を引っ張ってくれた。

ちよつとふらふらしてたのが直った様な気がした。

学校について少し落ち着いてきた。

ちよつと深呼吸。

私は今ドイツに住んでいる。

理由はお父さんの転勤

それなりに外国語は得意なのでそれほど苦労せずに生活には慣れた

生活には、だけどね

「琴子〜、宿題教えて〜」

ローラ……

「何でいつもローラは宿題しないの？」

ちよつとぶんぶんしながら言ってみる

「だって、人生には宿題なんかより大切なものがあるからよ」

…… 本人いたって真面目

まあ、私も多分同じようなこと考えるけど

「わかった。はい宿題」

昨日私が一晩かけて解いた数学の問題をローラに手渡した。

「わかってると思うけど私、数学苦手なんだからあんまり合っ  
てないかもしれないよ？」

本当に数学は苦手だ

だって、ただでさえ日本語でも苦手だったのにドイツ語でなんて

「大丈夫よ。琴子のは方針合ってるけど計算間違いがほとんどか  
ら私のほうで直しておくわよ。私が知りたいのはどう解くかだけだ  
から」

ねぎらってるのかねぎらつてないのかわからない言葉をかけられた  
まあ、でもローラのおかげで今まで宿題大丈夫だったんだからお礼  
を言うべきか。

「ありがとう、ローラ」

「琴子ってやっぱり変な子ね」

変な子呼ばわりされた。

「感謝するのは私のほうよ。ありがとう琴子」  
頭なでられた

「こ、子ども扱いしないでよう」

ちよつとしょんぼりする

ついでに恥ずかしい

「しかし琴子って大きいわよね」

「な、何が？」

ちよつと、後ずさりしながら聞いてみる

「それはもっちろん……」

むにっ

「ひ、ひゃあっ！ー！」

「この胸に決まってるでしょう」

むにむに

「や、ちょ、ちよつとやめてローラっ！ー」

う、ううう

「こ、これが必要ければ普通にいい子なのに」

「いやあ、いつ触っても琴子の胸はおっきいねえ」

「うう~~~~、ぐすん」

えらい目にあつたよう

「あはは、ごめんごめん。つい……」

「もうしない？」

「うん。今日はもうしない」

今日は、なんだ

「はあ……」

「でも、背も大きいよね。琴子は」

170cmあるから大きいほうだよ、女の子の中では

「うん。ちよつと嫌だつたりする」

大きければいいというものではないと思う。

特に背と胸は。

「えー、羨ましいけどなあ。モデルみたいで」

「そんなにいいもんじゃないよ？」

男の子からは胸のせいでいやらしい目で見られたり、

背の高いせいであんまり服ないし

「ふーん。そんなものなのね」

私にはわからないわ、と手をひらひらと振った。

私から見ればすべてが標準的サイズのローラがすごく羨ましいよ  
僻みだと思われるから心にしまっておこう。

「た、ただいまあ~~~~」

家に帰ると

「あ、琴子。ちよつとよかった」

お母さんがばたばたしながら私のほうに寄ってきた。

「お母さんどうかした？」

「ちよつと材料買い忘れたのあつて買ってくるから琴子ちよつと料  
理見てて」

そういつて急いでスーパーに向かう我が母。

「……………」  
いつも思うけど母は結構ドジっ子だ。

その血を私も引いてるから人の事いえないけど

とりあえず台所に向かうと、じゃがいもやらたまねぎやらがコトコト煮込まれていた。

「シチュー……かな」

ちよつと内心わくわく

シチュー シチュー

ちよつと火が強かったので弱火にしてお母さんが帰ってくるのを待った。

「いったただきまーす」

晩御飯ができたので早速食べる

もぐもぐ

「ところでお母さん、さっき何買いに行ってたの？」

「ああ、シチューのルーを買い忘れた……………」

「もー、シチュー作るのにルー買ってきてないって確実に作れないじゃない」

だからあんなに急いでたのか

「そうねえ。でもいつだったか圭佑君にバレンタインチョコ作るって言って肝心のチョコを買い忘れたのはどこの誰だったかな？」

う、そんな古い話を

「あ、あれはだつて忘れちゃったんだもん」

昔中学2年生ぐらいのときに、圭佑君っていう幼馴染にチョコあげようと材料買いに行ったら、

小麦粉とかはちゃんと買ってきたのにチョコがなくてさっきのお母さんみたいに急いで買いにいったことがある。

あの時はすごく混乱してたなあ。

「ふふっ、琴子もやっぱり母さんの子ね」



「いや、もうばれてるわよ」

「知らないもん！」

ど、どうして？

「どうして知ってるかと言うと、ドイツに来るときに空港に圭佑君  
いたじゃない？」

「うん」

……まさか本人に聞いたのかな

いや、けーくんはそういうこと言わないし

「それで？」

「二人の態度でわかつちやった。あはっ」

お、お母さん

その歳ではっとか言わないで欲しいよ

顔を真っ赤にしている私を見て、お母さんはしばらく笑いが止まら  
なかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4580b/>

---

空の心に

2011年1月28日14時11分発行